

た、赤潮や青潮が発生します。赤潮は植物性プランクトンが異常発生し、魚介類をへい死させて大きな漁業被害をもたらすことがあります。青潮は低酸素水塊が強風等により湧昇して海面付近に到達する際に硫化水素等が大気中の酸素と反応して海面が青くなる現象で赤潮と同じく魚介類の大量死の被害が出る場合があります。

大村湾への本県の取り組みとしては、「みらいにつなぐ宝の海・大村湾」として、森・里・川が一体となった里海作りを目指しています。大村湾全体に17カ所の観測点を決め、毎月水質検査を行っています。大村湾で観測される窒素、リンの数値はどちらも減少傾向にあり、近年は基準を超えていません。里山の管理や生物多様性の保全など多角的な取り組みがなされています。

その一つの取り組みとして時津・長与町は大村湾に注ぐ污水处理が他市町より格段に進んでいます。また、環境体験学習会を開いたり、浅場造成事業として人工的に再生砂や再生ガラスで浅場を造成しています。環境だけでなくSNS等でのインスタ映えスポットとして注目度を上げて観光資源につなげようとしています。

これからも宝の海である大村湾を後世に残すため、さまざまな実証実験等も行われていますが、費用対効果に見合わないため事業化に至らなかったものもあります。私たち住民としては大村湾で1年に20トンもの浮遊ゴミを回収していることから、漂着ゴミの学習会やゴミ拾いなどに参加したり、持ってきたものは必ず持ち帰るなど小さなことかもしれませんが実施していくことが大切だと思いました。

本県の環境関係を担当しているのは地域環境課ですが、閉鎖性海域担当は4人の職員です。水質検査は外部にも委託されていると思いますが、12もの閉鎖性海域を一手に担当されているご苦労も多いと思います。行政として大村湾を漁業関係だけでなく観光資源としても大いに活用し、宝の海・大村湾を未来につなげていきたいと改めて思いました。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

近年各地で宅地化が進み、生息していた野生動物が人里でもよく見られるようになっていきます。特にイノシシについては水稻、サツマイモ、ミカンなどに食害が出ています。食害だけでなく田植え直前のたんぼに入り泥浴びをしたり、収穫直前の田にはいることで米に獣臭がつき商品にならないなどの被害が出ています。

多くの方がイノシシは夜行性だと思っていますが、実は昼間も活動はしています。ただ人がいるので静かに潜伏しているだけで、案外近くに潜んでいるのかもしれませんが。本来は警戒心が強く臆病で注意深い性質ですが、いったん慣れてしまうと非常に大胆な行動をとります。体毛は太くて剛毛なので鼻先と腹以外は体が電気柵に触れても平気です。犬並みの嗅覚を持っていますが、視力は悪いです。大きな体ですが以外にも跳躍力に優れていて1mくらいなら助走なしでジャンプできます。また、20cmくらいの隙間なら潜り抜けできます。食性は植物中心の雑食で、季節の旬のものを食べています。人の畑などでおいしい食べ物を食べたことは忘れない記憶力を持っています。イノシシの寿命は平均2才で、長くて5才くらいです、出産は年1回。平均寿命が短いのは1才くらいまでに生まれたイノシシの半数くらいが死んでしまうからです。生き残れば2才くらいの頃出産します。行動範囲は半径でいうと5,600mくらいです。このようにイノシシは侮れない生き物です。

鳥獣被害の対策としては3つの対策があります。まず、侵入防護柵の設置です。設置だけではなく柵の維持管理が必要です。せっかく設置しても雑草が生い茂っていると設置した人にイ

ノシシの侵入経路が分からなくなります。次にイノシシが近寄りにくい環境を作ることです。収穫の残渣を放置したり、耕作放棄地の果樹をそのままにしておくことや稲の収穫後の二番穂（ひこばえ）の放置などは人にとっては不要なものでイノシシにとっては貴重な栄養源です。また、草刈りや樹木の間伐で隠れる場所、潜む場所をなくすことも被害を防ぐ有効な手段です。最後は圃場周辺に近づくイノシシの捕獲です。箱罾を設置したり猟銃の免許を持った人の協力ですが、近年狩猟免許を持った人が高齢化し、狩猟人口が減っているため現時点では捕獲隊は結成していません。本県の指定有形民俗文化財に西海市西海町中浦北郷の「西彼杵半島猪垣基点」があります。これは300年ほど前のもので、当時は半島を一周するように石垣が設置されていたそうです。このような石垣は五島や対馬にもあったそうです。先人たちも今の私たちと同じくイノシシと戦ってきたのだと思うと感慨深いです。生まれても半数が命を落とし、長くても5才くらいの寿命しかないイノシシなので、できるだけ殺処分は避けて、人が残渣を放置せず草刈りなどで環境を整えて山で暮らせるようにして共存していけたらいいと思いました。

【堀 真 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

油や農薬などが河川へ流出してしまうことで海の生き物が死んでしまう水質事故が現在形で問題になっていることが分かった。魚だけでなく我々の生活にも影響を及ぼすものであり、パリオリンピックのセーヌ川トライアスロンが例として挙げられると思う。選手が水質の影響で嘔吐するなど、身近なところで問題は起きている。幸い日本は環境美化意識が高く問題となることが少ないが、他人事と思わず県を挙げてパリのような悲惨な事態にならないよう一人一人が気を付けるべきだと感じた。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

1時間ほど講師が熱心に語られた。自分はイノシシに出くわしたこともイノシシの生態を調べたこともなかったが、長与町でも被害は起きているのは知っている。町民の生活を助けることが議員の仕事であり、イノシシの知見を広げるのも、鳥獣被害から町を守ることに繋がると考えている。イノシシにも生活はあるのだろうし、人間にも守るべき生活があるので、駆除一点張りではなく、共存を考えていけたらいいと思った。イノシシは餌が減り人様の畑に降りて食べに来ているということだったので、環境問題にここでつながるが、木を切り過ぎないようにするべきだと考えた。ジビエ肉を一度食べてみたくなった。

【岡田 義晴 議員】

本研修は、2つの講演からなっており、第1部は、閉鎖性水域の水質保全についてと題して長崎県県民生活環境部地域環境課地域環境班課長補佐の若松大輔氏による約1時間の講演。閉鎖性水域についての説明から大村湾の概要、水質状況そして本県の取り組みなどをレジュメ、パワーポイントを使い、分かりやすい説明がなされた。特筆すべき点とすれば、水質保全の難しさで、人が生きている限り経済活動は永遠に続き、水質改善は一朝一夕にはならず、粘り強い取り組みが必要と感じた。

第2部は、イノシシによる農作物被害を防止しようとして長崎県農林部農山村振興課鳥獣対策班課長補佐の小林達郎氏による約1時間の講演。内容としては、イノシシによる農業被害

の状況の説明そしてイノシシの生態、特徴や獣害被害対策をレジュメ、パワーポイントで詳しく解説された。とりわけ、動画を取入れた説明は大変興味深く、分かりやすかった。つい最近も本町の農業従事者からイノシシによる被害を聞くことがあったが、この講演を聞きながらイノシシ対策は大変な作業との実感が伝わった。そして問題解決には、行政、農家そして住民が一丸となって取り組む地道な努力が大事であると感じた。今回の研修を活かし、イノシシ対策の知恵を出し合いながらしっかりと取り組んでいきたい。

【藤田 明美 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

閉鎖性水域とは、内海や小湖など当該水域の容量に対して外部との水の交換が極めて小さい水域の総称であり、汚濁が進むと改善が難しい水域。全国では88カ所あり、本町に係る海域は大村湾であり、極めて閉鎖性の強い海域である。湾口部の水質は悪くないが、湾奥部では塩の流れが緩いため貧酸素水塊や赤潮が発生しやすい環境であり、大村湾の環境基準（人の健康を保護し、及び生活環境を保全する上で維持されることが望ましい基準）を1970年代から超えている。しかし、近年は基準達成の年もあり、長期的には改善傾向のようだ。

私が本町の湾で感じることは、釣りをしていて年々釣れなくなっている。これは水質が関係しているのだろうか。諫早に面する大村湾でも同じように感じる。

今回の研修で大村湾の水質改善のために県はいろいろな取り組みをしていることを知ることができた。海で子供と安心して遊ぶことができる水質であってほしいと思う。

私達一人一人ができることもあるので思いつくことを記しておく。

- ・生活排水の量を減らす。 例) 食器の汚れは拭き取ってから洗う
- ・米の研ぎ汁は植木の水やり等に再利用する。
- ・できるだけ油や調理くずを排水溝に流さない。
- ・洗剤類は生分解度（微生物の働きにより有機物が一定の期間に分解される割合）の高い石鹸や無リン洗剤を使う。
- ・シャンプー、リンス、洗濯洗剤などは適量を守る。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

イノシシによる農業被害の状況・生態と特徴、獣害被害対策について大変詳しく教えていただき、自然を守っていくことが自分たちの生活を守ることに繋がっていることを改めて感じた。イノシシが山から降りてきて農作物に与える食害の原因は、食べるものが里に豊富にある（山に食料が無い）、身を隠せる環境が沢山あるため。

被害対策として、1.侵入防止策の設置と管理 2.イノシシが近寄りにくい環境づくり 3.圃場周辺に近づくイノシシの捕獲、の3対策だそうだ。2.のイノシシが近寄りにくい環境づくりとは耕作放棄地の放任果樹をなくしたり、里山林整備をして隠れ場所・潜む場所をなくすこと。私は山の手入れを行うことで鬱蒼とした山林に日光が入りイノシシが食料とするドングリや草本類が育って里に降りずとも良い環境ができるのが理想だと思うが、誰が手入れに行くんだ?!と考えると答えが出ない。

イノシシは人間にとってタンパク源となる食料になるため、捕獲後のイノシシはどのようにするかを質問したかったが時間オーバーでできなかった。

①②の講演で、今後に起きるかもしれない食糧危機対策や、食料自給率を上げるためにも関

心を持って取り組む必要のあるもので大変勉強になりました。

【八木 亮三 議員】

一つ目の講演の閉鎖性水域は、つまり大村湾についてのことで、現在の大村湾の水質の状況や水質保全のための県の取り組みについてよく分かる内容でした。

近年、県内でも橘湾や島原半島などで赤潮による魚の大量死で甚大な漁業被害が出ており、外洋に面さず水の循環が少ない大村湾を心配していましたが、かつては環境基準を大きく超える汚濁のあった大村湾も平成中期以降は環境基準を達成する年も度々あるほど状況は改善・安定していること、そしてその要因として、県による法定基準より厳しい排水規制とその監視体制にあることに、安心しました。

沿岸生物による浄化機能強化のための「ガラスの砂浜」の取り組みが大村市だけでなく時津町でも行われていたことを今回初めて知りましたが、観光資源になることは大村市で実証されており、長与町でも実施を検討すべき取り組みだと思われました。近いうちに時津町の現地を確認してみたいと思います。

2年前、大村市が、水中に特殊なセラミックを沈めることで水質を改善するという委託事業に取り組んでいるという報道がありましたが、池や沼などの小規模かつ水の循環がまったくない水域ならまだしも、広大なかつ潮流のある大村湾にそのようなものを使用しても焼け石に水でしかないと思われ、県までも同事業を導入するようであれば、大村湾の流域自治体として長与町も事業費の一部負担などを求められないかと不安でしたが、質疑応答によって県にその予定はないと確認できてよかったです。

二つ目の講演についても、長与町でも実際に被害の出ている問題で、イノシシの特性などを詳細に知ることができたのはよかったです。同時に、決定的な解決策はいまだにないということで難しい課題であることも改めて感じました。最近では、駆除したイノシシやアナグマを食肉加工することで資源とする自治体・団体も出てきていますが、以前長与町役場の所管課に聞いたところでは、長与町の捕獲頭数では加工所の運営は費用対効果が合わず難しいということだったので、その方向での害獣駆除推進・奨励を県として検討できないか見解を聞きたいところでしたが、今回は時間がなく残念でした。

【松林 敏 議員】

大村湾は、全国に88カ所ある閉鎖性水域の中でも特に外海との海水の入れ替えが少ないと個人的に思っていたのですが、県の水質調査や水質保全の事業が行われていることを改めて紹介していただき大変勉強になりました。大村湾の外海とつながっている針尾と早岐から長与町は離れているため、水質保全はとても大切な事業だと感じました。本町の取り組みとしては、環境学習による親水意識の向上や、浮遊ゴミの除去作業を県と協力して継続して行くことが大切だと思います。大村湾は長与町にとって数少ない観光資源の1つであると個人的には思っているので、今後も気を付けていきたいと思っています。

自分の住んでいる地域はイノシシ被害が無いので、イノシシやイノシシ被害についてあまり知らなかったので勉強になりました。講演は以下の3部構成になっていて、

- (1)イノシシによる農業被害の状況
- (2)イノシシの生態、特徴

(3) 獣害被害対策

特に獣害被害対策については、住民への周知が必要であると感じました。また、イノシシ捕獲がいかに大変かの話がありましたが、持続可能なものとするために、捕獲隊というイノシシ捕獲のための組織を作ることが今後の課題だと思いました。

【西田 健 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

はじめに、閉鎖性水域についての説明を聞き「大村湾」の水質保全がいかに重要であるか、改めて理解した。いろいろな取り組みについて意識を高める意味でも、町民への周知がより一層必要であり、人の健康を維持し、生活環境を保全するため、水質の環境基準を低下させないよう真剣に取り組むべきと感じた。大村湾の水質状況は、以前よりも改善傾向にあるものの、基準値ぎりぎりの状況にある。今後も、説明にもあった各種施策を真剣に実施すべきと感じた。

また、流域の5市5町などで構成する「大村湾をきれいにする会」との連携を図り、大村湾内の浮遊ゴミの除去事業は、継続実施すべきと感じた。

最後に、これを機に、私自身も環境に関する勉強会へ積極的に参加するようにしたい。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

(1)イノシシによる農業被害の状況について各種事例のスライド説明があった。水稻（田植え直後、収穫直前）やミカンの被害状況を拝見し、農家の皆さんのお気持ちを察するに、更なる対策強化が必要であると感じた。

(2)被害対策について基本的な考え方として、イノシシの嫌う環境を作る対策が必要である。それらの対策について説明があった。ただ、各種侵入防止柵の設置については、イノシシとイタチごっこ的な様相を呈しており、かなり難しいと感じた。イノシシの捕獲は大変であると考えた。労力的・経費的負担について補助が必要と思う。

【浦川 圭一 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

閉鎖性水域の特性などを説明いただき、大村湾の概要なり、水質の状況を示していただいたが、近年は目標基準値を達成する年もあり、長期的には改善傾向にあるとのことで、引き続き排水対策など取り組んでいくことが重要と思った。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

イノシシによる農業被害の状況とイノシシの生態、特徴および獣被害対策について説明を受けた。県内におけるイノシシの農作物被害額と捕獲頭数の推移を見ると、被害額は平成16年の約4億6千万円をピークに令和4年度には約1億円と減少している状況にある。捕獲数も反比例して4倍程度の頭数となっている。多く捕獲すれば被害も減るとの結果であると思うが、合わせて耕作放棄地の草刈り、森林における間伐、下草刈りなどで隠れ場所、潜む場所をなくすなど、イノシシが近寄りにくい環境づくりが必要であると思った。

【中村 美穂 議員】

今回の西彼杵郡町議会正副議長会議員研修会は「閉鎖性水域の水質保全について」という演題で、長崎県県民生活環境部地域環境課 地域環境班 課長補佐 若松 大輔氏の講演と、「イ

ノシシによる農作物被害を防止しよう」という演題で、長崎県農林部農山村振興課 鳥獣対策班 課長補佐 小林 達郎氏の講演が行われた。

若松氏の講演の閉鎖性水域とは、内湾、湖沼など当該水域の容量に比して外部との水の交換が極めて小さい水域の総称で、汚濁が進むと改善が難しいところである。閉鎖性海域は大村湾である。大村湾の水質状況は、環境基準COD 2.0mg/L以下の近年は基準達成の年もあり、長期的には改善傾向である。大村湾の水質保全の取組として、昭和47年から水質モニタリング開始、49年環境基準設定、平成15年第1期大村湾環境保全・活性化行動計画を策定し、30年度には第4期大村湾環境保全・活性化行動計画策定している。生活排水対策や、工場・事業場排水対策、浅場造成事業、環境体験学習会、流域自治体との連携など、さまざまな県取組が行われている。地球温暖化による水温の上昇や、集中豪雨による影響も注視する必要がある。

小林氏の講演では、イノシシによる農業被害の状況が事例として取り上げられ、イノシシの生態や特徴についても詳しい説明があった。イノシシは広葉樹林や竹林、耕作放棄地を好んで生息する。1~2歳が寿命だが、5歳まで生きるものもいる。ドングリやタケノコ、芋類などを好んで食し、1回あたり600グラムほど食べる。獣害被害対策として防護、棲み分け、捕獲があり、侵入防止策の設置と柵の維持管理、イノシシが近寄りにくい環境づくり、箱わな、くくりわななどでの捕獲がある。しかし捕獲は大変な作業であり、地域みんなで協力して捕獲を行なって被害をなくしていかなければならない。

今回の研修は身近な大村湾の水質保全とイノシシによる農業被害についての長崎県の取り組みを直接聞くことができたので、今後の活動に活かしていきたいと思う。

【金子 恵 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

本県の水産業、漁獲物は、大村湾で獲られたものが多い。しかし、近年、その量は減少し食卓に上がる魚の価格も値上がりが続いている状況である。これは燃料費の高騰によるものとは限らず、漁獲量に関係していることは10年程前から続いている。その原因に関しては、さまざまな観点から、そして、そのための県の取り組みも聞くことができたが改善の見込みに関しては厳しいものがあると感じた。私たちの環境への意識を変えていくことこそが大切であることから、その周知を継続していくべきと思った。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

今回の研修内容は農作物の被害状況が主なものであったが、実際は民家のそばまで下りてきているイノシシ対策も考えていくべきと感じている。県の事業「里山整備計画」は緩衝帯を作ることによってイノシシと人間のすみ分けを目指したもののだがその効果は、ほぼないに等しく、また、農業者に限らず個人でのワイヤーメッシュの設置など実施しているがその被害を防止することはできていない。また、小学校から数メートルの場所に出没するなど、人への安全面も危機的状況であることから、根本的な対策がないものかと思いつつ話を聞いていた。

【山口 憲一郎 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

閉鎖性水域とは正直どのような事かあまり理解はしていなかったが、内湾、湖沼など当該水

域の容量に比して外部との水の交換が極めて小さい水域で汚濁が進むと改善が難しいことが分かった。そして大村湾は単一の県に面した全国的に稀な二重の閉鎖性を有する海域であることに鑑み、浅場や藻場の造成に対する支援制度を設けるなど環境保全や豊かな里海づくりに取り組みに関与し、国・県・市町及び住民等が連携する事業構築を行うことをされている。

私自身、山間部に育ち海を見る目として、「美しいね」「落ち着くね」とか、そのような感情しか思いはなかったが、美しい海の環境づくりがこのように守られていることを改めて学ばせていただいた。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

本日の研修内容については、講師の詳しい説明で主体的に理解できた。私もイノシシ被害経験者として、議員の皆さんに知っていただく良い機会だったと思う。しかし、本当の被害は、このようにやさしいものではない。国・県・市町から対策の資材は補助を受け設置をされ、多少の被害は食い止めはしているが、イノシシは頭が良く裏をかいて進入してくる。人とイノシシの知恵比べになっているが、人は根負けをする状況である。説明の中に捕獲隊の話があったが、どのように活動をされているかはわからないが、結局被害があつてからの行動が多いと思うが直接的な解決にはつながらないかと思う。

【堤 理志 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

今回の研修では、本町と水域が隣接している大村湾の閉鎖性水域の実情と課題等について、長崎県県民生活環境部地域環境課の職員から詳しい説明を頂いた。

大村湾では、汚水処理人口普及率が向上するにともない、CODの数値が環境基準値をやや上回る数値で横ばいの傾向となっている。また、長崎県においては工場や事業所からの排水対策として上乘せ・横出しの厳しい規制がなされており、水質汚濁の上昇を食い止めているものと考えられる。

しかしながら、現状以上に水質やCOD値を良好に保つ事は容易いことではない。大村湾沿線住民、事業所、行政等が大村湾の水質保全に念頭に置いた日々の生活やマナーの遵守が求められると感じた。

「大村湾をきれいにする会」との連携で、湾内の浮遊ゴミを除去する事業を行っており、毎年約20トンのゴミを回収しているとのことであった。その回収したゴミの画像を見ると明らかに人為的に排出したビニール袋に詰まったゴミもあれば、山間部から流出したであろう木材や、漁業用の発泡スチロールの残骸などもあり全てが悪質な廃棄ゴミではないと感じた。

エアレーションについて反対意見と予算の関係で断念しているが、閉鎖性海域においては、人工的に水の流れをつくり酸素を供給することは、貧酸素水塊を減少させ、溶存酸素量を増大する効果があると思うので、海域全体の水質改善に有効と考える。

<まとめとして>

地理的な状況から現状以上の劇的な改善を見込む事は困難と思うが、少しでも改善していく地道な取り組みを継続するとともに、新たな水質浄化の技術を研究者に行っていただき、さまざまな実証実験などにより、水質の改善に取り組んでいただきたい。

②イノシシによる農作物被害を防止しよう

長崎県農林部の2人の職員から講演を拝聴した。イノシシなど有害鳥獣による農作物の食い

荒らしなどによる被害は、農業者の就業意欲を注ぎ、なり手不足に拍車をかけていると感じる。農業者と会話をすると、必ずと言っていいほど、イノシシ・アナグマ対策を強化してほしいとの要望を受ける。また本町としても柑橘類が特産品でもあり、これらについては喫緊の課題となっていると感じる。

しかし、イノシシの生態を考えるとその対策は簡単ではないと感じる。鳥獣被害対策については、防護、住み分け、捕獲の「3対策」が言われているが、住み分けのための雑草の刈り払いは大変な労力がかかり、また私有地である耕作放棄地が猪の侵入路となっていると聞く。これらをどのように解決していくのかなど、非常に難しい課題、問題があると感じる。

【竹中 悟 議員】

大村湾においては全国5番目の閉鎖水域とされている閉鎖度指標 54.29、COD 2.3(R2)、環境基準 2.0、全窒素 0.2 以下、全燐 0.02 以下 である。長与町においては生活排水対策 99.7 と汚水度は改善されている。

浅場や藻場の造成に対する支援制度を設けるなど環境保全や豊かな里海づくりに貢献する取り組みに積極的に関与し国、県、市町及び住民等が連携する事業構築を行うことが必要であると結論がある。まさに4者が自覚し推進すべきである。

【西岡 克之 議員】

①「閉鎖性水域の水質保全について」

講師若松氏は5つに分けて講義していただいた。本県は、全国に88カ所ある閉鎖性水域の中で、12カ所あると聞いてその多さに驚いた。大村湾については、特に長与、時津町は一番奥にあり海水が変わりにくい地域であるので、大村湾に対する住民の意識をもっと高めなければという事を切実に感じた。

大村湾近所に住宅や、湾に接している住民とは同じ町民でも意識の差があるので埋めるべく両自治体は啓蒙活動を行うべきと思う。もう一つ学校や、保育園幼稚園など教員機関を通じて教育を行うべきと感じる。地球温暖化と同じで知らず知らずのうちに環境悪化が進むように、大村湾の環境悪化が進むのをくいとめなければと感じた。

②「イノシシによる農作物被害を防止しよう」

イノシシとの歴史的な戦いが西彼半島にある獅子垣が、現西海市西海町中浦北郷に1722年既に築かれていたことを知りそのような以前から人間とイノシシとの闘いが繰り広げられていることを知り、現代のメッシュを張り巡らすと同じような防止策を行っていたことを知った。いずこも同じような戦いがあっていただ感じた。また、生態についても詳しく説明していただいた。映像も多く使用して視覚から入って分かりやすかった。初めて知ることも数多くあり、大変に参考になった。以前他から日本オオカミが絶滅したのがイノシシが増えた一因だと聞いた。食物連鎖の頂点が絶滅したので、次に強いものが頂点になるとの事なのかなと考えた。しかし、現状を放置するわけには行かず改善策を考えて行かなければ作物被害が収まらないと感じる。

【安藤 克彦 議員】

大村湾は町民にとって身近なものである。また私自身、漁業にも携わる身だが大村湾に対す

る専門的・科学的な知見は持っていなかった。今回の研修で閉鎖性海域の特性や環境基準、水質状況等の理解が深まり、課題も見えた感じがする。国や自治体、団体や個人などによるさまざまな取り組みにより水質の改善が図られており今後も続けていかなければならない。

イノシシの問題については農業者からの話で知る程度だった。さまざまな対策を講じてもその上をいく賢い動物と思っていたが、実際に映像などを視聴して改めて対策の難しさを感じた。

今回研修した2つのテーマは、共に一般質問でよく話題になるが、今回全議員で共通の認識を持つことで、委員会などでも議論が深まることを期待したいと思う。